

シナイ通信

第15号

平成21年9月30日

NPO法人 シナイモツゴ郷の会



TEL/FAX 0229-56-2150

MAIL shinaimotsugo284@ybb.ne.jp

<http://www.geocities.jp/shinaimotsugo284/>

989-4102 宮城県大崎市鹿島台木間塚
字小谷地 504-1 鹿島台公民館内

10月開催共同シンポジウムを成功させ 市民・農民連携の自然再生を推進

今年も順調なシナイモツゴ里親制度とシナイモツゴ郷の米認証制度

だれでもできる技術を駆使したブラックバス駆除やシナイモツゴ里親制度、そして活動の長期継続と拡大をめざすシナイモツゴ郷の米認証制度は、会員の積極的な参加により今年も順調に展開されています。これらの成果を10月17日開催の共同シンポジウムで、長期継続可能な自然再生活動モデルとして提案予定です。

シンポジウム10月17日東北大学農学部で開催

「田園の魚をとりもどせ」のテーマで10月17日(土)仙台市の東北大学農学部で開催します。午前中の第一部では自然再生活動の長期継続をめざし、「自然再生と環境保全米」を語り合います。当会高橋副理事長の基調講演に続いて、滋賀県の水田で琵琶湖のニゴロブナなどを復元しながら環境保全米を生産している「魚のゆりかご水田協議会」をはじめとして県内3つの農民団体が取り組み事例を紹介します。午後の第二部では、民俗研究家結城登美雄先生の基調講演に続いて、全国各地で保護活動を展開している市民団体の取り組みや研究機関が開発した注目すべき新技術について紹介します。詳細は3ページとシナイモツゴ郷の会 URL をご覧ください。

だれでもできる技術の開発

市民と農民が自然再生の担い手になることで、全国津々浦々で自然再生を進めることが可能になります。このために必要なだれでもできる簡単な技術の開発に取り組んでいます。

①産卵ポットの改良

さらに効率良くシナイモツゴの採卵を行うため、新

型産卵ポット(写真)を考案作成しました。繁殖池で試験したところ、100%100%で産卵が見られました。さらに、バケツな



全面産卵の新型ポット

などへコンパクトに収納し通気しながら容易に搬送できるので、ふ化までの日数が多少長くても高いふ化率が得られるようになりました。

②プランクトンの簡単培養

ペットボトルを使ってミジンコなどプランクトンを家庭で手軽に培養する技術開発をミジンコ勉強会が進めています。会員は毎月1回の勉強会で情報交換を行いながら、自宅で培養試験を行っています。これまでにタマミジンコとその餌料となる植物プランクトンの長期培養に成功しました。これをふ化直後のシナイモツゴ稚魚に与えることで小型水槽でも簡単にシナイモツゴを繁殖させることができそうです。詳細は4ページをご覧ください。

シナイモツゴ里親制度

シナイモツゴを卵から育てる里親となった県内5つの小学校が現在シナイモツゴを飼育中です。特に今年は仙台市在住の当会インストラクターによる強力なサポートもあって、仙台市の2校で好成績のようです。詳細は8~9ページをご覧ください。

シナイモツゴ郷の米認証制度

平野の7割を占める田園の自然を守る主役は農民です。自然再生の大切さを共に学び理解しながら、消費者が農民の自然再生を支援する体制を構築します。

昨年からは生産販売を開始したシナイモツゴ郷の米、人気の秘密はユニークなストーリー性とおいしさにあります。昨年結成の生産販売組織「かしまだいシナイモツゴ郷の米つくり手の会」には今年になって生産者4名が新たに参画しました。さらに、来年は池干ししてブラックバスを退治したため池へシナイモツゴを放流し、生産増大を計画しています。おいしくて安全なシナイモツゴ郷の米を購入することで農業者の自然再

生活活動を支援し、自然豊かな田園を取りもどしましょう。詳細は、URL「かしまだいシナイモツゴ郷の米つくり手の会」をご覧ください。

品井沼ヒシの栽培試験

自然の貴重な恵みを実感するために、「品井沼ひしを育てる会」と共同実施しています。在来種品井沼ヒシの栽培試験を5年前から実施し、特産化を目指しています。最大の課題はジュンサイハクイムシの食害です。今年はハクイムシに食べられた分を成長促進する作戦に切り替えました。肥料を多めに与え、ヒシをモリモリ成長させるというもので、今年の天候も幸いしたのか食害はあったもののこれまで最高の収穫量となりました。9月12日から収穫を開始したところ、多くの報道機関から取材があり、育てる会のメンバーはてんこ舞いでした。品井沼ヒシを食べたい方は、URL「互市どっと込む」をご覧ください。

食と農を見つめ直し、自然再生の為に今出来ること...

<会報 第3号 平成21年8月10日発行>

宮城県大崎市かしまだい

さと まい

シナイモツゴ郷の米 通信



シナイモツゴ郷の米



うまいもんセット



出荷作業の様子



展示品が完売！

「ご愛顧ありがとうございました！」

宮城県大崎市鹿島台発の、小さな取り組みから始まったこの「シナイモツゴ郷の米」も皆様のおかげで、やっとお手元まで届けることが出来ました。また、鹿島台の特産品デリシャストマトの缶ジュースを詰め合わせた「うまいもんセット」も好評で、北は北海道から南は福岡まで、本当に多くの皆様のご支援ありがとうございました。

私たちは集落全体で、天然記念物がすむ水源を守り、周辺環境の自然再生と保全活動をしながら、減農薬・減化学肥料での安全で安心なお米づくりに取り組んでいます。

今後も地域を支える想いを大事にしながら、じっくりと丁寧な米づくりを心がけて参りますので、よろしくお願いいたします。

「いよいよ二年目がはじまりました。」

初年度は4人の生産者でスタートした郷の米も、今年は深谷地区で3人、広長地区で3人、作付面積は約5町歩、つくり手の会の会員も12人と増え、皆さんのおかげで着実に理解の輪が広がってきました。

今年も減農薬・減化学肥料で「ひとめぼれ」を栽培していますが、品質には特にこだわって、美味しいお米が収穫出来るように取り組みます。

シナイモツゴ郷の
米つくり手の会の
広報誌

水辺の自然再生

田園の魚を

共同
シンポジウム

とりもどせ



シナイモツゴ (宮城)

平野の7割を占める田園で進行する生態系破壊。
豊かな自然をとりもどすための理論と実際を語りあう。

総合司会 東北大学大学院農学研究科 南 卓志
趣旨説明 NPO法人シナイモツゴ郷の会 二宮 景喜

第1部 自然再生活動と環境保全米

基調講演 長期継続をめざす自然再生活動モデルの提案
NPO法人シナイモツゴ郷の会 高橋 清孝

- 滋賀県「魚のゆりかご水田米」 堀 彰男
- 大崎市田尻「ふゆみずたんぼ米」 西沢 誠弘
- 大崎市鳴子「ゆきむすび」 上野 健夫
- 大崎市鹿島台「シナイモツゴ郷の米」 吉田 千代志



ニゴロブナ (滋賀)

試食会 12:00~13:00 先着100名 9:00から会場受付で整理券発行
シナイモツゴ郷の米、ひしご飯、みやぎのポーク軟骨スープ

第2部 水辺の自然再生—理論と実際

基調講演 自然再生の戦略と実践
民俗研究家 結城 登美雄

座長：全国ブラックバス防除市民ネットワーク 小林 光

- メダカの保全 前宮城内水試 坂本 啓
- ニゴロブナの復元 滋賀県農政水産部 堀 明弘
- フェロモンによるバス・ギル退治 伊豆沼環境財団 藤本 泰文
- 水田魚道—理論と実際 福井県土地連 鈴木 正貴
- 水田魚道—改良と実際 トジョウ・ナマズ研究会 三塚 牧夫
- 広瀬川のアユ—成長と環境特性 東北大農 庄子 充広
- 広瀬川のアユ—移動経路の確保

宮城内水試 縄田 暁・宮城仙台土木 小林 晴紀

- 秋田の在来魚復元 秋田淡水魚研究会 杉山 秀樹
 - 里親が育てるシナイモツゴ 大崎市立鹿島台小
 - 都市近郊の取り組み NPO法人宍塚の自然と歴史の会 及川 ひろみ
- 総合討論

会場：東北大学農学部 仙台市青葉区堤通雨宮町1-1

期 日：2009年10月17日(土) 9:30~17:30

主 催：NPO法人シナイモツゴ郷の会、東北大学農学部
全国ブラックバス防除市民ネットワーク、伊豆沼・内沼トジョウ・ナマズ研究会
後 援：大崎市、JAみどりの、NPO法人農村地域づくり支援隊
大阪コミュニティ財団(東洋ゴムグループ)

問い合わせ先 シナイモツゴ郷の会 (MAIL:yy0910@ktj.biglobe.ne.jp, TEL:0229-56-2150)



メダカ (宮城)



トジョウ (福井)



ゼニタナゴ (秋田)

ミジンコ勉強会に参加して

丹野 充

今年4月シナイモツゴ郷の会の高橋さんよりペットボトルでミジンコの培養実験をやってみないかとの話がありました。ミジンコをペットボトルで培養できるのは???半信半疑!!!でも、とてもおもしろそうで簡単そうです。ミジンコには関心があったので、早速、参加させてもらいました。実は、私の飼育する数種類の淡水魚の中で、メダカなどは沢山卵を産むのですが、孵化後の生き残りが少なく、餌の確保に頭を悩ましていたのです。

まず、緑の水、すなわちグリーンウォーター（以下GWとする）を作ることから始めることになりました。用意された60Lのコンテナ衣装箱に手持ちの液肥（米糠、ミール、鶏糞を水に溶かして発酵させたもの）と既に作り置きしたGWを適量投入し水で希釈しました。

いよいよ実験用のミジンコを採集しようと、4月末になって越冬した水草の水槽から数種類を掬い上げ、同形のミジンコ（ダフニア）を選んで、各々10尾を2本の4Lボトルに少量のGWを入れ、1つのボトルには水温データーログと水温計を入れて全量3Lで始めました。

5月に入って、少量の液肥を与えながらペットボトル内の水を見ると、緑色だったものが少し透明になってきました。



毎月開催されるミジンコ勉強会

これはミジンコが盛んに増殖しつつあることを示しております。そこでミジンコを顕微鏡で見ると消化管に緑模様のスジが見え、GWを取り込んでいる様子が分かりました。ペットボトルは外から簡単に内部の変化を見ることができて、便利です。同様にGWを作ることができます。

4～5月には、ミジンコを投入して10日目で60～120倍くらい、2週目で120～180倍となり、第1回目の新ボトルへ移植を行い、これまでの2本を4本に増やして培養再開です。

6月の梅雨に入り、水温は20℃前後で経過して、やが

て夏至近くになると太陽高度も上がり、日陰にも日光が当たるようになってきました。晴れた日は淡水魚の水槽と同じように簾を掛け日覆をしました。ところが3～4時間外出した日に日覆いを掛け忘れたために、ボトル内の水温が急上昇して、これまで順調に増えていたミジンコは高温障害でほとんど死滅してしまいました。とても悔やまれましたが、後の祭りです。

ミジンコを増殖を見ると、6月になって新ボトルに移植後の3～4日はそれほど増殖は進みませんが、それ以降急速に増えてきました。高密度に増殖してボトル内の緑色が薄くなってきたら、一部を魚に与えて、その分GWを補給します。GWの換水量をあまり多くしないで半分に留めると再び活発に増殖するようです。

7人の実験メンバーは、ミジンコ勉強会と称して5月から毎月1回、鹿島台公民館に集まって情報交換しています。実際やって見ると色々問題が起きて、その解決策を種々話し合いました。会合を重ねるごとに、ミジンコを持ち寄って、顕微鏡でミジンコの種類を確かめながら、実写したカメラ画像を見せてもらいました。時には、メンバーから、ミジンコ餌料の提供やGWの作成法について助言もあります。

培養実験を始めて、短期間ながら多くの成果が得られました。今年はミジンコとタマミジンコの培養にほぼ成功しました。しかし、まだまだ未解決の課題が多く、こ

れを契機に郷の会の皆さんと協力して、最良の目標が達成されることを望んでいます。この度は実験に参加された会員の皆様の有意義な話を聞きながら、大いに勉強させていただきました。私にとって未だ道半ばですが今後とも宜しくご教授ください。



ペットボトルで繁殖したタマミジンコ



移動研修会 in 牡鹿 参加報告

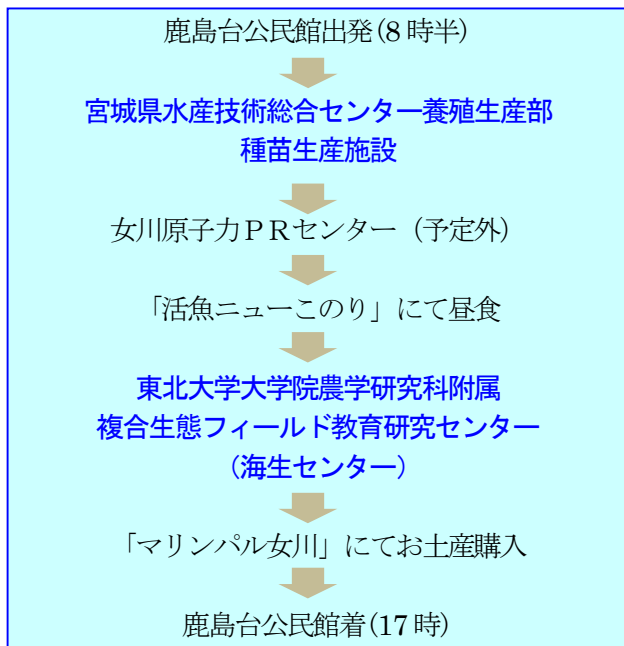
久保田龍二



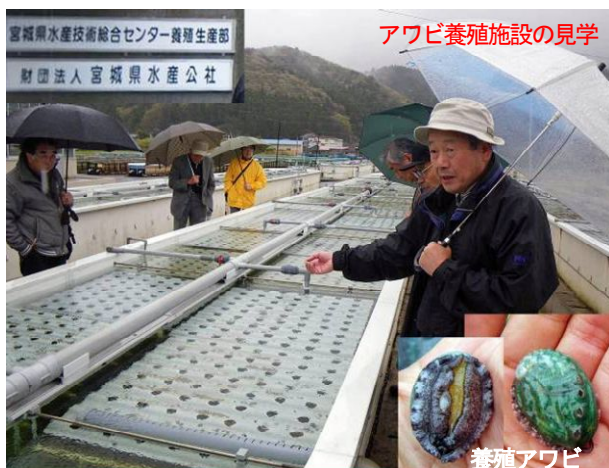
はじめに

鹿島台では桜の見頃も終わり、これから里山では新緑の美しい季節になりますが、毎年、春の恒例となっています「移動研修会」が2009年4月25日に開催され、15名の方が参加されました。当日は新緑とは打って変わって大雨注意報が出る生憎の荒天でしたが、今回は里ではなく「海の生き物」をテーマにした研修会でしたのでそれもよしということで……。

さて、今年度の研修会ですが宮城県牡鹿半島にある2つの海生物に関する研究施設を見学しました。スケジュールは以下のとおりで順を追って説明します。



宮城県水産技術総合センター 種苗生産施設

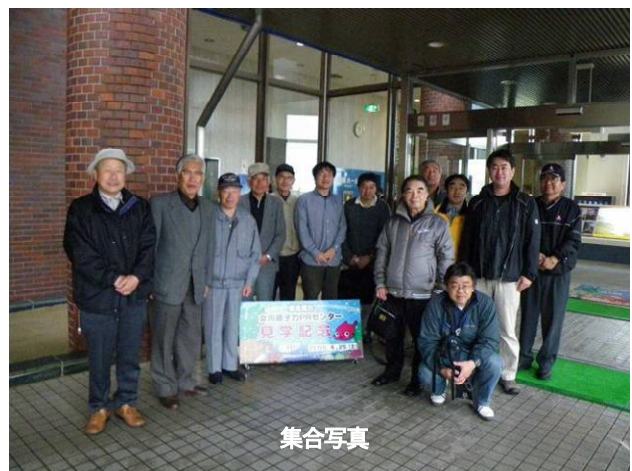


ここではアワビ、ヒラメ、クロソイなどの種苗生産を行っており、アワビの稚貝、全長80cm程の大型ヒラメ、孵化したばかりのクロソイ仔魚などを見学しま

した。特にアワビは成長の良い個体を継代繁殖させた養殖専用種苗と天然アワビを親とする一般の放流用種苗の2系統があります。養殖専用種苗は成長は良いが自然界に放流しても動きが遅いなどで淘汰されることや天然個体との交配を考慮して放流は禁止となっているそうです。

写真を見て分かるとおり養殖物のアワビは殻が綺麗な緑色をしています。この色は放流しても残りますが、放流してから成長した分の外側の殻は通常の色になりますので天然物か放流物かの区別がつかます。

女川原子力PRセンター

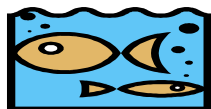


昼食までに時間が余ったため予定外ではありますが、女川原子力PRセンターを見学しました。なんと参加者の中には女川原発を作ったという方もいらっしゃいました。

Lunch Time



昼食は女川にある「活魚ニューこのり」で天井をいただきました。この店はアナゴ丼(¥1,500)が名物だそうです。1日10食限定で予約は出来ないそうです。



池田実先生による講

海生センターでは池田准教授に施設や研究内容、スタッフの紹介などをご説明していただきました。研究内容としては水生生物の集団遺伝学に関することが主で、代表例としてヤマトシジミのトレーサビリティー、ヒジキの分子生態学、カワリヌマエビ種群の国内侵入実態など説明していただきました。

また当会に関連しそうな話題として「東北地方のヌカエビ集団の遺伝子分布」のお話では、太平洋側と日本海側のヌカエビでは遺伝子に違いが見られ、保全生態学的には進化的に重要な保全単位（将来的に別種に進化する可能性）であるそうで、いまのところ日本海側と太平洋側での人為的な移動などは無いようです。普段何気なく見ているヌカエビにもそのような違いがあるのだと感心したとともに形態的な違いなどもあるのか調べてみたい気がしました。



魚取沼のテツギョ

実験水槽等の見学

講義の後には、海生センターの研究室、実験室、畜養施設などを見学しました。

遺伝子解析に用いる装置は数 100～数 1000 万円とのことで市民団体や民間企業ではなかなか出来ないことだ

と思いました。また水槽には魚取沼(ゆとりぬま)で採集されたテツギョやミステリー・クレイフィッシュが飼育されていました。

クレイフィッシュとはザリガニのことで、つまり「不思議なザリガニ」という意味です。このザリガニは観賞用などで流通しているそうですが、早だけで殖えることができる（単為生殖）不思議なザリガニです。このことが明らかになったのは 2003 年にフンボルト大学の博士が「ネイチャー(Nature)」誌等の科学雑誌で発表してから知られるようになったそうです。見せていただいた個体は日本のあるところで採集した個体だそうで、他の外来種同様、自然界で増えないことを祈るばかりです。但し、早だけで増えるということは全てが同じ遺伝子を持ったクローンというわけで実験動物としては価値が高いということだそうです。

池田先生には品井沼基産のシナイモツゴについての遺伝子学的な共同研究などを行いたい旨をお伝えしました。今後、学術的な研究も併せてシナイモツゴの保護・保全活動が出来ればより良いことと思います。

マリンパル女川（お土産 Time）



産物色

見学も終わり、帰途につく前にマリンパル女川にて新鮮な魚介類や干物、クジラの刺身などをお土産に買って帰りました。

おわりに

今回の研修会はこれまでのような、地域で活動されている個人や団体ではなく、宮城県(官)や東北大学(学)の各研究施設を見学し、研究者の方から最新の研究内容をご講義頂き、今までとはまた違った意味での有意義な研修会ではなかったでしょうか。

また、私たち NPO などの市民団体が地元宮城の官・学などとの連携を今後よりいっそう深めていくという意味でも成果があったものと感じます。

ドジョウと遊ぶ

長谷川 政智

去年（2008年）のこと、近くのそば屋の主人からどじょうを頂き、どじょう汁にして食べた。私が子供のころは、田んぼの中を流れる用水路（幅2m深さ20cmのコンクリート化されていない土水路）でどじょうを捕る人がいた。網を仕掛けておき、10mくらい下流から竹の先に缶からをつけ、それを小刻みに動かし網まで追い込んでいく方法だ。これだけで網の中は、ザリガニ、クチボソ、タイリクバラタナゴ、メダカ、どじょうがいっぱい捕れていた。その様な環境の中でどじ



水田の主演ドジョウ

ょう汁は、ごく普通に食べていた。しかし、田んぼの圃場整備が始まり、用水路や畦がコンクリートになってからは、どじょう捕りで捕れていた生き物たちが姿を消した。必然的にどじょう汁も食べなくなっていた。

そんな時、偶然にもどじょうを頂きどじょう汁して食べたことがきっかけとなり、どじょうを自分で捕って食べようと企てた。しかし、今は昔と違ってコンクリート化されない用水路や畦がほとんど無く、あっても生き物が棲めないところがほとんどだ。幸いにも、今住んでいるところは山の近くで、そこを流れる小沢は、コンクリート化されてはいるものの下流では田んぼとの接点もあり、どじょうが小沢を上ってきていた。そこにドジョウどう（竹でできたどじょうをとる道具）を仕掛けどじょうをとることにした。5月から開

始して、2日で1～2尾で、多い時で3～4匹の収穫ながらも、塵も積もればのことわざのように2週間も続けると、どじょう汁で食べられるようになった。どじょうを捕っていると小学生の子供たちが興味を示し、一緒にドジョウどうを見に行くことが多くなった。何故かという、ドジョウどうではどじょうの他に、イモリ、オニヤンマのヤゴ、アブラハヤ、沼エビ、カワニナなどさまざまな生き物が捕れるからだ。

また、珍しい事にも遭遇した。それは、上陸する蛍の幼虫を見つけたことだ。蛍は、幼虫の時、川の中でカワニナを食べ成長し、その後、岸に上陸し土中でサナギになり、そして夏に羽化する。夏にはここで蛍が見られるのではと子供たちと楽しみにしていた。6月下旬、予想通り蛍を見ることができた。それも、ヘイケ蛍とゲンジ蛍の2種類だ。この地に住んで10年、今までは、この季節に遠くまで行って蛍を見に行っていたのが、この夏には近場で見れ感激だった。ちょっとしたきっかけから親はどじょう汁を味わい、子供たちは生物とふれあうことができた。この環境を末永く大事にして行きたいものだ。



水田で魚とりを楽しむ子供たち

シナイモツゴ里親活動の紹介

二 宮 景 喜

今年も、県内の各小学校がシナイモツゴの里親として活動しております。

昨年は天候その他の条件が整わずうまくいかなかった学校もありましたが、無事冬越しをして成長したシナイモツゴ合計約500尾を、5月下旬に各校の子ども達の手で回収しました。そのうち約300尾は、6月5日に、鹿島台小学校の子ども達が鹿島台広長地区のため池に放流しています。

今年の新たな増殖活動は、小野小学校が校舎の耐震工事のために池が使えず、4校での活動になりましたが、現在各校とも順調に稚魚が育っているという報告をいただいております。特に昨年不調だった鶴谷小学校（仙台市宮城野区）では、水草の間を稚魚が群れになって泳いでいるのが見られるとのことでした。

各校とも、成長した魚を回収した直後に、池の清掃や餌となるミジンコをわかせる土を入れるなど準備作業を行いました。作業はなるべく子ども達や先生方と郷の会メンバーが



底の餌を食べるシナイモツゴ

協同でやるようにしています。水をはり、池の準備が整ったところで、タイミングを計って鹿島台の繁殖池から発眼卵を運びます。その際、子ども達に卵をじっくり見てもらってから、自分たちの手で池に入れてもらうようにしています。小さい卵の中でピクピク動く眼は子ども達には大きな驚きのようで、まさに生命の神秘に感動しているようでした。

そのようなイベントの折、各校の子ども達の代表が挨拶をしてくれます。2つほど紹介したいと思います。

仙台市立松陵小学校 1年 すがわら かいと君

「ぼくは、こうちょうせんせいのところで、いつもしないもつごをみています。

きょう、たまごをもらって、おおきくなるのがたのしみです。だいにそだてます。」

大崎市立鹿島台小学校 4年 佐藤 光君

「ぼくはシナイモツゴが天ねんきねん物で、その数が少ないということを知っておどろきました。今、学級で

シナイモツゴをかっているの、えさやりやかんさつをわすれないようにして、たまごをうませてみたいです。そして、天ねんのシナイモツゴがこのちいきでたくさんふえるように、ぼくたちでできることを調べて、がんばって育ててみたいです。」

作業やイベントだけでなく、時には教室にお邪魔して、シナイモツゴについての授業をしています。東松島市立小野小学校では、4年生全員が郷の会宛に手紙を書いてくれました。子どもたちの反応を直接知ることができ、私どもにとっても大変励みになりましたので、そのうちから3つほど紹介させていただきます。

●「先日はシナイモツゴの話をいろいろ聞かせて下さってありがとうございました。

シナイモツゴをすくう時、一度に何ひきもとれたので、びっくりしました。シナイモツゴが小さいのもびっくりしました。ピチピチして元気そうでした。もっと元気に育ってほしいです。

シナイモツゴの説明をして下さった時、とても分かりやすかったです。これからも、お体に気をつけて、いろいろな人にシナイモツゴを知ってもらえるようにがんばってください。」（菅原 衣通（いつ）さん）

●「先日はシナイモツゴの育て方などを教えて下さって、ありがとうございました。

シナイモツゴがおくびょうで、かくれがを水そうの中に入れてあげたらいいなど、私の知らないことを教えてもらい、シナイモツゴのことをいろいろ知りました。シナイモツゴのことをいろいろ教えて下さってありがとうございました。」（高橋 千尋さん）

●「先日はシナイモツゴについていろいろお話をきかせてくれて、ありがとうございます。シナイモツゴのいる沼には、ブラックバスがいないからあんぜんでいいとおもいました。

これからお体にきをつけて、シナイモツゴを守ってください。」（鈴木 柊平君）

秋口は、シナイモツゴも餌をたっぷり食べて成長していく時期です。里親としてシナイモツゴを育てることで、自然を大切にする心が子ども達にもますます育っていくものと信じています。

絶滅危惧種シナイモツゴの学校での里親活動

仙台市立松陵小学校 成瀬 茂

今から6年前に、私が仙台市立大倉小学校勤務を始めたころ、「シナイモツゴ、飼育してみないですか？」というお電話をいただきました。以前、仙台市岩切市民センターに勤務していた時の三浦一雄元館長さんからでした。三浦元館長さんとは、岩切市民センターで「スズムシの飼育・繁殖」に取り組み、私もいまでも自宅でスズムシを飼育しており、そんなご縁でお電話をいただいたようです。

ただ、「シナイモツゴ」について、私は何も知りませんでした。大倉小学校の自然環境がシナイモツゴの飼育に適しているか否か、「シナイモツゴ郷の会」の方々に現地を見ていただくことになりました。大倉の冬の寒ささえ凌げれば、飼育には最適との判断をいただき、早速「特別調達の水槽」をお貸しいただきました。設置場所は校舎の西端の庇のある場所にしました。第一に、職員がいなくても幼児や児童が転落したりしないよう、安全面に配慮しました。次に、シナイモツゴにとって最適な環境が確保できるようにしました。

シナイモツゴの卵からの飼育方法についてご指南いただいたとおり、孵化したばかりの幼魚のえさとなる「生きた水中微生物」を繁殖させるため、近くから田圃の土を持ってきて入れました。気温・水温が適当だったためか、目で確認できるぐらい水中微生物はすぐに繁殖しました。プラスチック製鉢の内側にびっしりと産み付けられたシナイモツゴの卵をいただき、順調に飼育がスタートしたかに思えました。しかし、せっかく生まれたシナイモツゴがどんどん減っていきました。あわてて理科室の水槽にも分けて、2カ所で飼育を試みました。

失敗した原因ははっきりしていました。田圃の土を入れたため水槽の水は茶色に濁り、透明度がほとんどありません。私は、シナイモツゴのためにきれいな水のほうがいいだろうと考え、水道水を注意深く加えながら何回もオーバーフローしたり底の栓を外して水を抜いたりして、水槽の水を透明に近づけました。シナイモツゴの

幼魚は観察しやすくなりましたが、数がどんどん減っていきました。水がきれいになりすぎたため、餌になる水中微生物が繁殖できなくなってしまうのです。逆に、理科室で飼育していたシナイモツゴは日当たりが適度にあり、水槽の水はいつも濃い緑色をしていました。時々与える餌に群がるようにして捕食する姿は見あきることがなく、ついつい観察の時間が長くなってしまいました。水槽はホテイアオイを浮かべ、底に洗い砂を敷いただけでエアープンプは使用していませんでしたが、シナイモツゴは遅しく元気に成長していきました。

3年前に仙台市立松陵小学校に転任したところ、校庭に立派な観察用の池がありました。今度はこの池でシナイモツゴの里親としてきちんと飼育することとしました。自然環境に近づけるために池の掃除から始めました。水中微生物を繁殖させるため、市販のドライイースト菌を1袋投入しました。効果てき面ですぐに水中微生物が繁殖しました。卵からかえったシナイモツゴの幼魚は活発に微生物を捕食し、順調に成長していきました。池に氷が張るぐらい寒かった冬を無事過ごしたシナイモツゴに、ご褒美として餌を与えると、日に日に大きく遅しく成長しました。

いろいろな条件をうまく整えることができたようで、次のシーズンには観察用の池に産卵したらしく、成魚に交じって孵化したばかりの稚魚も捕獲できました。

「シナイモツゴの里親」としての活動を通して、少しずつ子供たちの関心も高くなり、卵の贈呈式後には「シナイモツゴを見せてください。」「シナイモツゴに餌をあげさせてください。」と頻繁に部屋訪問する児童の姿が見られるようになっていました。生き物を飼育する活動を通して、子供たちに「自然環境を大切にする心」「命を大切にする心」が育つことを願って「里親」をつづけております。



シナイモツゴBCC通信から (No148 : 5月27日配信)

みなさま

魚たちの繁殖最盛期を迎え、大忙しとなりました。

水温も 20℃を超え植物も繁茂し、今、水辺は1年で最も良い季節です。

是非、お出かけください。

イベント情報

①第2回シナイモツゴ繁殖池見学会

里親への提供用に採卵している繁殖池の見学会を開催します。

今年は新型の産卵ポットを試しています。

発眼卵があれば水槽でふ化飼育する里親を希望される方へ提供します。

5月30日(日)午後2時00分

宿泊施設「みちのく路」下の駐車場に集合

②シナイモツゴ放流会

里親小学校が1年間育てていただいたシナイモツゴ稚魚を安全なため池へ放流します。

6月5日 10:30 鹿島台広長に集合

参加者： 鹿島台小学校、シナイモツゴ郷の米作り手の会、広長行政区他

③伊豆沼バス・バスターズ

毎週日曜日、9:00

伊豆沼サンクチュアリセンター集合

鹿島台から乗り合い希望の方は高橋までご連絡ください。

④定例会・理事会

6月20日(土)午後6時

鹿島台公民館

活動スケジュールや秋のシンポジウムなどを話し合います。

成果情報

①シナイモツゴ稚魚の回収

里親小学校の池から稚魚の回収作業が進んでいます。

鹿島台小学校と小野小学校ですでに約400尾の稚魚を收容、新たなふ化飼育のため清掃されました。

②新型産卵ポット

繁殖池で産卵ポットの改良型が活躍しています。従来のポットを半切にしたもので、5月16日に100%の産卵が確認されました。

下面のみの産卵になりますが、これにより卵の損傷が減少し、運搬作業も効率化します。

シナイモツゴBCC通信

会員の情報共有を図るため、毎月2~3回メール配信しています。配信を希望される方は事務局へFAXでお知らせください。

③ミジンコのペットボトル培養

コイ科魚類の人工繁殖に不可欠なミジンコ、ミジンコの繁殖ができればふ化飼育は無理なくできます。そこで今年はペットボトルによる「だれでもできるミジンコ培養」技術開発と取り組んでいます。現在、9名の会員が自宅で悪戦苦闘しながらも、ミジンコを毎日観察して楽しんでいます。結果が楽しみです。

シナイはアイヌ語で大きな川(沢)を意味します。小さな流れが大きな川になるように地道な活動を続けていきましょう。